

2024 年 12 月 6 日

報道機関 各位

核兵器廃絶に向けたメッセージを発表 ノーベル平和賞授与式に合わせ、長崎大学と核兵器廃絶研究センター（RECNA）

2024 年 12 月 10 日（火）、ノルウェーのオスロにおいて日本原水爆被害者団体協議会にノーベル平和賞が授与されます。それに合わせて長崎大学（長崎市 学長：永安武）は核兵器の廃絶を訴えるメッセージを発表します。また、同時に長崎大学核兵器廃絶研究センター（センター長：吉田文彦 以下 RECNA）も、「レクナの目」を発表いたします。「レクナの目」は、その時々々の平和に関する国内外の情勢、出来事など、時宜に合わせて見解を発表するものです。

本リリースにその文面を添付いたします。日本原水爆被害者団体協議会へのノーベル平和賞授与に合わせた見解のため、情報解禁日時を授与式に合わせ、2024 年 12 月 10 日（火）21 時（日本時間）と設定させていただきます。ご協力のほど、お願いいたします。なお、同日時に大学のメッセージは長崎大学ホームページへ掲出し、「レクナの目」は RECNA の web サイトで公開する予定です。

長崎大学では、被爆 80 年を前に、日本原水爆被害者団体協議会のノーベル平和賞受賞により「長崎を最後の被爆地に」という願いがさらに強く世界に広まり、核兵器廃絶への取り組みを加速する一助となるべく、この声明を発表することにしました。

長崎大学ホームページ

<https://www.nagasaki-u.ac.jp/>



RECNA web サイト

<https://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/topics/47897>



【本リリースに関するお問い合わせ先】

長崎大学 広報戦略本部

TEL : 095-819-2008

E-mail kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

核兵器廃絶研究センター

TEL : 095-819-2164

E-mail recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp

日本原水爆被害者団体協議会のノーベル平和賞受賞に心よりお慶び申し上げます

12月10日（火）、ノルウェーのオスロにおいて、ノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会（被団協）様へ授与されました。栄えある受賞を心よりお祝い申し上げます。

しかし、残念ながら世界の核兵器を取り巻く状況はとても楽観できる状況にはありません。特に2022年に始まったウクライナ侵攻では、核の超大国ロシアが片方の当事者であり、あからさまな核の恫喝がおこなわれています。さらに11月にはプーチン大統領が実質的に核兵器の使用基準を引き下げた文書に署名し、その脅しにさらに拍車がかかったとも伝えられています。核兵器のグローバルリスクは拡大し、今、私たち人類は非常に危険な時にいると言えるのではないのでしょうか。

長崎大学は「地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的発展に貢献する」ことを理念に掲げる大学として、2012年に核兵器廃絶研究センター（RECNA）を開設し、核抑止力に依存しない安全保障の枠組みづくりに貢献できる調査研究や政策提言、さらには学生教育を続けています。さらに、本年6月にはグローバルリスク研究センター（CGR）を立ち上げ、核兵器のリスクと深く関わる環境問題や経済格差といった他のリスクとの関連まで視野に入れた文理協働、学際的研究へも乗り出しています。

今回の被団協様の受賞を機に、私達もまたこれらの活動をより一層深化、活性化させ、共に「核なき世界の実現」「長崎を最後の被爆地に」という使命の完遂に邁進してまいります。

長年にわたり被爆者のお立場から核兵器の恐ろしさと廃絶を世界に訴え、同時に被爆者への支援活動を続けてこられた被団協の皆様の活動とご尽力に心より敬意を表し、重ねてこの度の受賞にお祝いを申し上げます。

2024年12月10日
国立大学法人長崎大学長
永安 武

A Congratulatory Message from Nagasaki University

On Tuesday, December 10th, the Nobel Peace Prize was awarded to the Japan Confederation of A- and H-Bomb Sufferers Organizations (Nihon Hidankyo) in Oslo, Norway. I would like to extend my sincere congratulations on this prestigious and momentous achievement.

Unfortunately, the situation surrounding nuclear weapons in the world is far from optimistic. In particular, in the invasion of Ukraine that began in 2022, Russia, a nuclear superpower, is one of the parties involved, and there has been blatant nuclear intimidation. Furthermore, it is reported that President Putin signed a document in November that effectively lowers the threshold for the use of nuclear weapons, further intensifying the threat. The global risk of nuclear weapons is increasing, and humanity is now living in perilous times.

Nagasaki University embraces the philosophy that “We contribute to the harmonious development of our society by creating science that will bear peace on Earth.” In 2012, we established the Research Center for Nuclear Weapons Abolition (RECNA) and have continuously contributed to research, policy, and education aimed at creating a security framework that does not rely on nuclear deterrence. Furthermore, in June this year, we established the Research Center for Global Risk (CGR), and we are also engaging in interdisciplinary research and collaborative studies that explore the connections between the risks associated with nuclear weapons and other risks, such as environmental issues and economic disparities. On the occasion of the recent award to Nihon Hidankyo, we are committed to further deepening and revitalizing our activities. We aspire to achieve objectives such as a “world free from nuclear weapons” and “let Nagasaki be the last.”

We would like to express our deepest respect for the members of Nihon Hidankyo, who have tirelessly conveyed to the world the grim reality of nuclear weapons and advocated for their abolition while at the same time supporting atomic bomb survivors for many years. Once again, we extend our warmest congratulations on this well-deserved award.

December 10th, 2024

Takeshi Nagayasu

President, Nagasaki University

日本被団協のノーベル平和賞受賞の意義を考える

「レクナの日」

2024 年 12 月 10 日

オスロの現地時間で本日午後、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）がノーベル平和賞を受賞した。核兵器廃絶をその名に冠した被爆地長崎にある研究機関として、RECNA は日本被団協に心からの祝意をお伝えしたい。「レクナの日」では個人名で考えを示すのは異例のことだが、この歴史的瞬間を大切にするためにとくに、核兵器廃絶運動出身の研究者である河合公明教授と中村桂子准教授が受賞の意義を綴ることにした。

「このノーベル平和賞は皆さんと一緒に受賞したものです。」発表から数日後、和田征子さん（日本被団協事務局次長）の言葉が私の胸を打った。被爆者は、想像を超える苦しみと悲しみを抱えながら、「私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」（日本被団協結成宣言）との決意で立ち上がった。証言活動は国際的な連帯を生み出し、2017 年 7 月には核兵器禁止条約の採択への道を切り開いた。その場に立ち合い、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）へのノーベル平和賞授賞式で同年 12 月にオスロを訪れたことは、私にとって生涯忘れえない出来事であった。

「キノコ雲の下で何が起きていたのか」を生涯かけて語り続けてきた被爆者の活動の意義は、核兵器廃絶運動にとどまらない。戦争は国際法で禁止され、一般市民は保護の対象とされているにもかかわらず、今もウクライナや中東では戦争で多くの一般市民が犠牲となっている。こうした状況を前に、被爆者が問いかけるのは、「戦争で苦しむのは誰か」という点である。「攻撃する側」の論理ではなく、「攻撃される側」の現実を考えることを求めているのだ。力と不信に基づく安全保障の限界を超え、共感と連帯に基づく安全保障という選択肢へ進むよう、常に問いかけている。

被爆者の証言活動がもつ「伝承」の力は、攻撃する側の論理を問い直し、核兵器も戦争もない世界を建設するための原動力になる。そのエネルギーを受け継ぎ、共感と連帯に基づく安全保障について長崎から発信することが、核兵器廃絶運動を経てアカデミアに身を置く私の使命である。それこそが、私にとっての「伝承」である。被爆者から継承するメッセージを、今度は私たちが主体者としてどのように国内外に「伝承」していくか。このことを、被爆 80 年を迎える長崎の地で皆さんと一緒に考えていきたい。（河合公明）

ノーベル平和委員会が「日本被団協」の名を告げた瞬間、すでに鬼籍に入られた方を含む、あの方この方の顔が次々と脳裏に浮かんだ。私が今の仕事をする上で、大きな影響を受けた被爆者の方々だ。彼ら彼女らの存在がなければ、私の仕事への向き合い方はまったく違うものになっていただろう。そして私に限らず、核兵器廃絶に取り組む研究者、実務家、NGO 関係者の中に、被爆者との出会いが自分の人生を変えた、と振り返る者は決して少なくない。

世界中の人々の心を動かし、行動へと鼓舞してきたのは、被爆者が語ってきた「あの日」の惨状だけではない。言葉通り身を削りながら、「他の誰にも同じ思いをさせたくない」と訴えてきた被爆者の生き様が示す、深い思想や哲学に共鳴してきたからに他ならない。

日本被団協「結成宣言」が出されたのは、被爆からわずか11年の1956年8月だった。政府からの公的な支援は存在せず、多くの被爆者が心身への深い傷、生活苦、差別や偏見にあえいでいた。被爆者が残した数々の証言には、自らの運命を嘆き、あの日死んでしまった方たちを羨みさえするといった、壮絶な心情が吐露されている。しかしそうした苦しみと葛藤の中でも、被爆者は、「もうだまっておれないでてをつないで立ち上がろう」（結成宣言）と動き出したのである。

それから68年余――被爆者が体現してきたのは、暴力と憎しみの連鎖を断ち切る人間の強さであった。もちろんそれは簡単なことではない。しかし、困難な時代にあっても、被爆者は希望を捨てず、他者の苦しみに共感し、公共善の実現に向けて対話を行うことをあきらめなかった。それは不信と暴力が跋扈する今の世界の対極にあるものであり、私たちにそれを乗り越える力があることを思い起こさせる。血で血を洗うような争いが続く今だからこそ、私たちはあらためて被爆者の歩みから学ぶ必要がある。（中村桂子）

被爆者の歩みは、共感と連帯を基盤とした新たな安全保障の構築への道筋をさし示している。この道筋を継承し、さらに国内外で伝承していくことは、次世代の私たちが担うべき責任である。日本被団協のノーベル平和賞受賞は、その責任について考える機会を与えている。